私をひきつけてやまないもの それはモンゴルの地平線と ピンホール写真の静かな風景

人 HITO

保坂　健（けん）さん
（写真家）

保坂さんは、今年の９月に、15年前から撮り続けている中央アジアのウイグル自治区をテーマにした写真展を、東京をはじめ日本各地で開催します。保坂さんの表現する厳しさと柔らかさを、皆さんもぜひご覧ください。

「カメラの語源である『カメラオブスキュラ』という言葉は『暗い部屋』という意味で、これこそピンホールカメラそのものです。」と言う保坂さんは、写真雑誌への執筆や海外ドキュメント写真の撮影に忙しい、入間川にお住まいの写真家です。

その保坂さんがピンホール写真に魅（み）せられ、自作のピンホールカメラで撮影を始めたのは、今から10年ほど前のことでした。「針穴写真って理科の実験で体験することはあるかもしれないけど、本格的にやっている写真家っていませんよね。僕はそれを、突き詰めてやりたかったんです。」と、ピンホール写真を始めたきっかけを語ります。まさに針穴ほどの穴を空けた真っ暗な箱の中で一定時間フィルムを露光させ、シャッター代わりの黒い蓋（ふた）でふさぐ、これがピンホール写真の撮り方。できあがった写真はレンズを通さない分、光が素直に物を描写し、柔らかく独特のにじみが出て、イメージがはっきりと伝わる現代の写真とはまったく違う雰囲気になります。そのピンホール写真を保坂さんは「静かな、音のない風景。凝視した風景」と表現します。そして「ピンホール写真で撮るものは、人間が見るものの本来の姿、質感なのだと思います。人は見たものをイメージとして記憶に残しますが、それはとても曖昧（あいまい）なものです。その曖昧さがピンホール写真でなら表せる。これがこの写真の気持ちよさ、私にとっては『いやし』とも言えるものなんです。」とも。

保坂さんは、ピンホール写真の撮影だけでなく、たびたび中央アジアに出かけ、そこに住む人々の暮らしをドキュメントとして撮り続けています。「いつか、僕が自分に一番近いと感じるモンゴルの民族の写真をピンホールカメラで撮ってみたい。とても自然環境の厳しい土地でなかなか長い滞在ができないから、露光に時間がかかるピンホールカメラで写すのは結構難しいんだけどね。」と笑う保坂さん。

厳しい土地の人々の暮らしをしっかりと見つめる目と、ピンホール写真の静かな柔らかい表現を兼ね備えた、不思議な魅力の持ち主でした。

狭山の生態系 71

セグロセキレイ
（スズメ目セキレイ科）

全長約21㎝。ハクセキレイによく似ていますが、ややがっちりした体つきで、尾が少し短く、雄も雌も同色です。上面と胸は黒色、下面は白色です。額からは白い眉のような斑紋が下向きに伸び、翼は白と黒色です。世界的には、日本だけに生息する特産種です。九州より北で繁殖し、積雪地でも越冬します。平地や山地の川岸、湖畔などの水辺の小石が敷きつめられたような場所を好み、昆虫を捕食します。チーチージョイジョイと少し濁った声でさえずります。市内では、入間川河川敷をはじめ農耕地や住宅地でも、よく見られます。

撮影：県生態系保護協会狭山支部
矢内昭夫さん（水野）

私たち交通指導員の仕事は「誘導」することではなく「指導」をすることなのです

REPORTER'S EYE

【リポーター】
阿部扶美子さん（つつじ野在住）

リポーターズアイでは、行政のしくみや話題性のあることがら、市内のいろいろな施設などを、市民のかたがリポートします。

4月、交通ルールに不慣れな新1年生が、今までよりも広範囲に行動するようになります。保護者のかたは、子どもが出かけてから家に帰って来るまで、とても心配な時期ではないでしょうか。今回は、これからの時期、特に子どもの交通事故の増加が懸念されるということで、交通指導員の仕事をリポートしました。

お話をうかがったのは、子どもたちを見守り続け、今年で25年というベテラン交通指導員の須藤さんです。交通指導員は、市の委嘱を受け、登下校時の指導と、小学校や幼稚園で開催される交通安全教室、そして関係団体や市との連携による啓発活動などを行っています。特に通学路での指導は月曜日から土曜日まで毎日のことなので、寒い時期や雨・雪など天候の悪い日は本当に大変な仕事だと思いました。また、スクールゾーン時間規制（通学路になっている道路で朝7時30分から8時30分まで交通規制により車両の進入ができなくなる場所）では、強引に進入し、通過してしまうドライバーもいるそうで、「通れないと不便なこともよく分かりますし、忙しい時間でイライラしてしまう気持ちは理解できますが、子どもたちの安全のためにも、ぜひルールを守っていただきたいです。」とのことでした。

年長児の交通安全教室では、ランドセルの重さなども体験させます。

指導員の皆さんは毎日交差点に立っているので、いろいろな人との交流があります。毎日、自主的にスクールゾーンの入口に立ってドライバーに注意を呼びかけてくださるかたがいらっしゃるそうです。また、ドライバーに注意を呼びかけるために、実物大の人形を作って道端に置いてくださるかたもいらっしゃるそうです。須藤さんは、「こういった地域の大人の温かい目は、子どもの成長にとても重要だと思いますし、それによって保護者の皆さんがより積極的に啓発に乗り出してくださっている地域もあるんですよ。」と話していました。そして、「私たちが行っているのは、『誘導』ではなく『指導』です。だからその場を安全に渡すだけでなく、どこの交差点や横断歩道でも、指導されたことを思い出し、安全に渡ることができる子どもになってもらうことが、私たちの仕事の一番の目的なんです。」ともおっしゃり、私も保護者の一人として本当にありがたいと思いました。親は毎日のあわただしさの中でついルールを忘れてしまったり、子どもにきちんと説明ができなかったりということがままあります。実際の現場で交通指導員さんから教えられると、自分のこととして分かりやすく、子どもたちも素直に耳を傾けられるのではないかと思います。

「毎日顔を合わせて根気よく声をかけ続けると、初めは無視していた子どもも、だんだん変わってくるのが分かります。まちがえたかのように笑みを見せたり、挨拶をしてくれるようになったとき、心が通じたと思え、とてもうれしいものです。」という言葉に須藤さんの大きな愛情を感じ、これからも大切な子どもたちのために頑張っていただきたいと思いました。そして、交通指導員の皆さんにすべておまかせしてしまうのではなく、家庭でも交通ルールについて、実践を交えながらしっかりとしつけていかなければいけないと改めて思いました。